

北陸大学ライブラリーセンター報

Bulletin NO.17

⇒をクリックすると本文がご覧になれます。

⇒ 第3回北陸大学読書感想文コンクール

⇒ 表彰式挨拶

北野 与一
(ライブラリーセンター長)

⇒ <最優秀賞>「高瀬舟」を読んで

縄野 梓

⇒ <優秀賞>「沖縄 平和の礎」を読んで

松島 正幸

⇒ <優秀賞>「ヒロシマ・ノート」を読んで

山田 昌弘

⇒ <優秀賞>「塩狩峠」を読んで

細川 舞子

⇒ 「教育と読書」

南谷 直利
(学術資料委員)

HOKURIKU UNIVERSITY LIBRARY CENTER

北陸大学ライブラリーセンター報
1st-Half 2004



第3回北陸大学読書感想文コンクール 入賞者9名を表彰

昨年度、北陸大学学生を対象にした第3回「北陸大学読書感想文コンクール」を実施し、締め切りの10月末日までに89点の応募があり、延べ3回にわたる厳正な審査を行った。審査には、松井祐子法学部教授（審査委員長）、鉢野正樹外国語学部教授（学術資料部長）、王涵外国語学部教授、指田春喜薬学部助教授の4氏が当たった。審査の結果、次のとおり最優秀賞1点・優秀賞3点・佳作5点を入賞と決定し、2月9日（月）午後12時45分からライブラリーセンターで表彰式を行い、入賞者に賞状と副賞を授与した。また、入賞者以外の応募者には、後日、参加賞（図書カード）を授与した。



入賞作品

📖 最優秀賞

「高瀬舟」を読んで

縄野 梓（薬学部 薬学科 2年次生）

📖 優秀賞

「沖縄 平和の礎」を読んで

松島 正幸（法学部 法律学科 2年次生）

「ヒロシマ・ノート」を読んで

山田 昌弘（法学部 政治学科 3年次生）

「塩狩峠」を読んで

細川 舞子（法学部 法律学科 3年次生）

📖 佳作

「城之崎にて」を読んで

永井 亮子（外国語学部 英米語学科 3年次生）

「椿姫」を読んで

于 坤（外国語学部 中国語学科 1年次生）

「三国志 風と雲と龍」を読んで

村元 良徳（法学部 法律学科 1年次生）

時代の悪と戦った田中正造について

北西 恵（法学部 法律学科 2年次生）

「福翁自伝」を読んで

鈴木 慶太（法学部 法律学科 2年次生）

（備考）以上の表記は、平成15年2月9日現在です。

表彰式挨拶

ライブラリーセンター長 北野 与一

第3回読書感想文コンクールで入賞された皆さん、おめでとうございます。

このコンクールは、このライブラリーを利用している本学の学生の読書欲を刺激し、知力や思考力を更に向上させ、ひいては人間力をより豊かに育てていくことを目的として企画されたものであります。

私たちは、からだや体力などをトレーニングするときには、スポーツ施設を多く利用します。同じように、知力や思考力などをトレーニングするときには、読書が最適なのであります。そのためには、書物の宝庫であるライブラリーを活用し、日々トレーニングすることが大切だと思います。

皆さんがこのコンクールの趣旨をよく理解し、立派な感想文を提出され、見事入賞された人たちであり、主催者を代表して心から敬意を表します。次回も又、更に研さんを積んだ感想文を提出され、栄冠を手にするよう希望いたします。

なお、作品の選考に当たり、学術資料委員会の先生方が慎重に審査、協議されたことについて報告し、先生方に厚くお礼を申し上げる次第であります。

終わりに、優秀賞に輝いた作品は、本学の「ライブラリーセンター報」に掲載させて頂き、全学生に公開したいと企画されておりますので、ご了承のほどお願いいたします。

簡単ではありますが、お祝いのことばといたします。



(北野ライブラリーセンター長 挨拶)



(松井祐子 元法学部教授・審査委員長 講評)

最優秀賞

「高瀬舟」を読んで

著者 森 鷗外

出版社 角川書店

縄野 梓



医療技術の進歩によりいつの日か、人間は不死を手に入れることが可能となるのではないかと考えてしまう。だからこそ、今、私たちは「生」と「死」に向き合うことが求められている。生きながらえることが、本当に幸せといえるのか。そして、本当の幸せとはどこにあるのだろうか。高瀬舟の著者、森鷗外は私たちに生きるということの意味を問いかけている。

江戸時代、弟殺しの罪により島流しとなった喜助。彼は、確かに弟の命を絶った。治りそうもないので殺して欲しいと懇願する病床の弟に刀を向けたのである。周りの人間たちは、彼を罪人と騒ぎたてたが、護送中も彼の表情は穏やかであった。

人間にとって本当の幸せとはなんだろうか。毎日、楽しく笑い過ごせる人は少ないと思う。多くの人は苦しいことや辛いことの中に、ほんの小さな幸せを見つけ、生きることに喜びを見出していると思う。しかし、喜助の弟のように兄の生計に頼り、治る見込みもない寝たきりの身であって、自身が生きているということさえ感じられなかったはずだ。「幸せを感じるのはどんな時か?」という質問に対して、「生きているから幸せ。」と答える人は少ないだろう。人間が、苦しく辛いことも多い人生に耐えることが出来るのは、その向こうに自分の求める幸せがあるからだ。それゆえ、喜助の弟は「死」を求めたのである。

私は、「死」が全ての終わりだとは思わない。確かに肉体は滅んでしまいが、心までも消えてしまうとは思いたくない。「死」に直面して、初めて人間は真の心を持てると以前どこかで聞いたことがある。人類が地球上に誕生して以来、私たちは科学技術の進歩を追求し、多くのものを手に入れてきた。しかし、いつの時代も私たち人間は未完成であったのではないだろうか。怒り・悲しみ・喜びなど様々な感情を持ち生きる人間。だが、どうして、怒り・悲しみ・喜ぶのか。もしも、「死」が存在しなければこのような感情も存在しないと私は思う。人の痛みや別れに涙を流し、互いを理解できないことに憤りを感じ、誰かを愛しく思うことに喜びを抱くのは、私たちの人生が有限のものであるからであり、その人生が終わるとき初めて私たち人間は、全てを受け入れ、人間として完成するのではないだろうか。

真っ白な心で生まれてきても、成長するに従い、感情や欲望などが私たちの心を占めていく。それらを脱ぎ捨てることが出来るのは、「死」をも含む全てを受け入れたときである。その時、私たちは真の心を得、完成した人間となるのではないか。私たちの祖先といわれるネアンデルタール人の墓の傍から、花が見つかっている。彼らも私たちと同じように「死」を畏れ敬い、死者に花を手向け、悲しみの涙を流したのだろう。

世界の国には、安楽死を認めている国もある。癌やエイズなどの病気を根本から治す薬はまだない。また、これらの末期には激痛が伴う。そんな時、安楽死を真っ向から否定するのは辛い。薬によって生きな

がらえさせ、ただ最期まで生かすことに執着する医療は物悲しく思われる。大切なことは一人の人間がどのように生きてきたかであり、これからは「死」を受け入れる医療がさらに必要とされるだろう。そして、高齢者社会の日本も例外ではない。

喜助は、弟の本当の幸せを受け入れ彼の死に手を貸した。そのため、自分自身は島流しとなる。しかし、喜助は、少ない稼ぎのためにあくせくと働く町での生活の全てを捨て、殺人者としての新しい人生を受け入れることにむしろ希望を持ったのだと思う。護送中の喜助の穏やかな表情は人間の真の心の表われであったのかもしれない。



審査委員長から一言

審査委員長
松井祐子

今年度読書感想文コンクールの応募者総数は、昨年度に比べると相当増加しました。このことは青少年たちの「読書離れ」が言われる中で、本学の多数の学生諸子が自分の一冊を求めて読書に勤しんだことの証として嬉しく思います。

応募の動機は様々であったと思いますが、読書を通じて自分が感じ、考えたことを一文にまとめる作業を行うことで、自らを見つめる機会の一助になったことでしょうか。また、それは他者に自己を開陳する情報の創造であったとも言えます。

青年期は「自分探しの時期」と言われます。人間は自分の目で自分の顔や姿の全てを見ることができないように、本当の自分を知るためには、様々な人やモノ・コトとの「出会い」が必要です。読書はその機会を与えてくれる一つの優れた手段です。

今年度の感想文に取り上げられているテーマは、私たちのごく身近なものから人間存在の本質に迫るものなど、多岐にわたっていました。その中で最優秀賞に選ばれた作品は、肉親の安楽死を幫助した主人公の生き方を通して、日々死を意識することなく生きている私たちに、“生きる”ことの意味を鋭く問いかける重いテーマを扱ったものです。そのほか、人の一生を決めるほどの大きな出会いや生き様、教育などに関するもの、あるいは人間の諸活動をささえる食生活や運動にかかわるものなどを取り上げた高水準の作品が多く、入賞はなりませんでしたが心が動かされる佳作もいくつかありました。惜しくも選に漏れた人たちは、これに懲りず来年度再挑戦してみてください。

多感な青年期の出会いはその人の人生を実り豊かなものにします。書物を手にとり、著者や作品に登場する人・コト・モノと出会ってみませんか。人生において最も自由な時間に恵まれている学生時代にこそ読書に励み、良き「出会い」体験をして下さることを願っています。

優秀賞

「沖縄 平和の礎」を読んで

松島 正幸



著者 大田 昌秀

出版社 岩波書店

この本を選んだとき、私はこの著者の名前をどこかで聞いたことがあるような気がした。それは私が中学生のころ、TVのニュースでよく取り上げられていた。彼の名前は大田昌秀。以前沖縄県知事をつとめていた人だった。そのころ、沖縄では普天間基地問題や米軍兵による少女暴行事件などで、沖縄の問題が全国で取り上げられていた。彼が新聞やTVのニュースでこの問題に取り組んでいる姿を目にし、この人は戦後、沖縄の平和のために戦ってきたリーダーだと感じた。そして私はこの大田氏についてもっと知りたいと思うようになった。

1945年、太平洋戦争の末期に起った沖縄戦に関する彼の体験の描写は私の中で強く残っている。鉄血勤皇隊やひめゆり隊などがとりわけ有名だが、沖縄師範学校に通っていた大田氏も当時沖縄守備軍に動員されていた。彼は学友たちと共に戦闘に参加していたが、戦闘中、右足に至近弾を浴びて負傷し、仲間とはぐれ、摩文仁海岸付近に身を潜めていた。そうした中、ある日、一人の男と出会った。それは戦場に英英辞典を携えている白井という兵隊だった。

彼は大田氏が食料探しのついでに米兵のテントから拾ってきた英文雑誌をむさぼるように読み、「日本は戦争に負けた、戦争に降伏したんだ。」と語った。それを聞いた大田氏は日本が戦争に負けたということよりも、英文を理解できない自分の無学さを感じた。英語が読めるということで、今の世界の情勢を説明できる白井氏がうらやましかった。英語を学ぶことが新しい世界を開いていくのだと実感し、学ぶことの重要性を痛感させられたのだった。「君も生き延びることができたら東京へ出て英語を勉強しろよ。」白井氏が言った一言が後の大田氏の人生を決めた。

沖縄戦を生き残ることのできた大田氏は迷うことなく英語を専攻し、大学そして大学院に進学し、学ぶことの喜びを満喫した。その後、琉球大学の講師となり、以後32年間ジャーナリストとして沖縄戦の実態の解明に没頭したのだった。1990年には沖縄の県知事になり、沖縄の米軍基地反対の意思を政府に突きつけ、現在では国会議員として平和のために活躍している。

私は、彼のプロフィールを見て、若きころ体験した沖縄戦こそが、後の人生を決定付けたのだと感じた。大田氏は沖縄戦で白井氏と出会い、英語を通じて世界の広さを知ったことにより、戦後、戦争と平和について研究した。また県知事時代に「米軍基地反対」と政府に訴えて沖縄県民に誇りと自信を与えた。これは大田氏の人間としてのすごさだと私は思った。

大田氏は沖縄問題の中でもとりわけ米軍基地問題に熱心に取り組んだ。私は米軍基地問題が沖縄にとって最も深刻な問題だと改めて思い知らされた。特に普天間基地の移設問題が重要であったと書かれている。普天間基地は街の真ん中にあり、周辺には小学校から大学までたくさんの施設がある。万が一、墜落事故

が起こったら大変な惨事になるだろう。現在では2015年を目標に3回に分けて日本に返還されることになっているそうだ。しかし、いまだに移設先も決まっていないので、マスコミによって移設先の市町村長の反対運動は必須だと言われている。これからも普天間基地の移設についての審議に注目が集まることだろう。

太平洋戦争が終わりもうすぐ60年ほど経つが、戦争の「遺物」として沖縄に米軍基地が残されている。そして、沖縄から米軍基地を無くし、安心して毎日を暮らせるようになることが沖縄にとって真の平和が訪れるのだと感じた。この本によって沖縄の戦争中、そして戦後、人々の血のにじむような努力が痛いほど伝わってきた。この苦しみは、本土の人間には想像もできないほどであったろう。沖縄の人々が人一倍平和への思いが強いのは、この戦争の辛さを後世の人たちに味あわせたくないからではないか。私もこの本をきっかけとして戦争について学び、平和についてもっと深く学習していきたいと思った。

審査委員から一言

審査委員
王 涵

今回の読書感想文コンクールの審査員として、私は北陸大学の学生諸君の読書力の素晴らしさに感服しました。留学生も積極的に参加しましたが、残念ながら入賞作品は一点だけでした。「やっぱりだめだ。私なんて」とがっかりして自信がなくなった学生もいるらしい。たしかに同じ審査基準では、留学生の君たちにとって、厳しかったのは事実だけど、決してあきらめないで、これからもより一層読書の楽しさを味わってください。

読書感想文というのは、自らの考えを表現するものです。ある場面や言葉に触れる瞬間、心の底から湧いてきた思いを、手元のノートに記し、心の落ち着く居場所を見つけた充実感を得られる本を読むことによって、人の心はより安らぐことでしょう。

寄贈図書

本学の教職員から、下記のとおり図書の寄贈がありました。ありがとうございました。

著 者	書 名	寄 贈 者
木下 是雄	レポートの組み立て方	松井 祐子（元法学部教授）
佐野新一・蒲真理子	青年期からの健康・運動科学	佐野 新一（元外国語学部教授）
叶 秋男 [ほか]	21世紀の世界と日本	叶 秋男（元法学部教授）

優秀賞

「ヒロシマ・ノート」を読んで

山田 昌弘



著者 大江健三郎

出版社 岩波書店

ヒロシマ・ノートを読み、広島の内から見た被爆後20年間を知る事が出来ました。この本を読むまで、広島のごことはほとんどといってもいい程知らなかった自分が恥ずかしいと思いました。原爆を一番最初に落とされた国にすんでいるのだから、広島のご被爆者がどういふ思いで生きてのかを知る必要があると思ひました。

この本は、著書が広島を訪問する度に書いたレポートを一冊の本にまとめたものでした。その最初の旅は、1963年夏の原水爆禁止世界大会でした。著者によると日本の若者が一人の原爆症の老人に色々な質問をしたといふことです。何も知らない若者達に、原爆症で弱った老人が夏の炎天下の下、自らの寿命を縮めようとも原爆の恐ろしさを伝えようと語り続けたといふエピソードが強く印象に残っています。

原爆が人に対して落とされたのは、この広島が世界で初めてだから、原爆症にかかった人も初めてです。ケロイドで顔がゆがんで家の奥で閉じこもってしまったたくさんの女の人や、ほんの一瞬で死んでしまった人々も瓦礫がれきの下に埋もれて死んでしまった人々も、みんなが、ただ爆弾を広島に落とすと決定されただけのために被害にあってしまったのです。

戦争はもうじき終わると思っていたのに、皆がもううんざりだと感じていたのに、引き際をあやまった軍部や国家のために死に至ったのです。誰もが、もう少し早く終わらせる事が出来れば、原爆なんか落とされずに済んだのにと思っただと思ひます。

次に印象深いのは原爆症になり、なすすべなく死んでゆく人や自殺した人々の事です。ある少女が自分のカルテに骨髄性白血病と書かれているのを見て自殺したのです。たぶん自分もそうすと思ひます。現代なら治る可能性もあるけれど、当時の医学ではどうしようもなくただ苦しみがいて死んでゆくだけだと思ひました。

もう一つ印象深いのは、ソ連が核実験再開を表明した時に日本政府がそれに抗議せずに黙認した事に腹を立てた原爆症の老人が、原爆慰霊碑の前で割腹自殺を試みたといふ話です。老人は自分が自殺する事により、その波紋が核実験禁止の方向にひろがると期待したのです。しかし、この老人の命がけの抗議も、アメリカやソ連、その他多くの核保有国からあっさりと無視されてしまったのは、とても悲しいことだっただと思ひました。

原爆症といふ未知の病気と闘った医師や、多くの傷ついた人々を手当てした看護師達の事も忘れてはいけません。この人達は自らも原爆を受け、ボロボロになっている体で看病し続けたのです。白血病の白血球の増加を食い止めて、寿命を引き延ばす事にも成功しました。しかし、少し寿命を延ばしたとしても、その先には確実に死が待っています。一人の医師がある白血病の青年の病気を隠して仕事を紹

介しました。その青年は一生懸命に働き、恋人も見つけて結婚もしました。その内死ぬと分かっている、ただ病院のベッドの中で死んでゆくよりも、最後まで人間らしく生活して死んでいく方が良いと思います。青年が死んだ次の日に妻が医師達にお礼を言いに行きました。その翌日妻は自殺しました。

戦争の影には、このような人々がもっとたくさんいます。どうせ死ぬんだからとか言うのではなく、人間らしい生活をして幸せになってほしいという願いをこめた医師の計画の結果は、悲しかったです。ただベッドで死んで行くだけのたくさんの人々を見続けて来たから医師達をそうさせたのだと思います。

戦争なんてしたくないのに、ただ広島に居たというだけで被爆したたくさんの人々が悲しい運命^{たど}を迎えました。当時の広島には幸せな人なんて一人もいないのではと思います。原爆症で苦しみ、身内を失い、子供が奇形児だとかいう人々ばかりだと思えます。核兵器を作るとどうなってしまうのかは誰もがもう分かりきった事だと思えます。核を持っているアメリカやロシアやその他の国々は広島にこれだけの悲劇的な出来事があったという事を知らないのですか？もうみんな分かっているから核を捨ててほしいです。もう二度と広島^の悲劇は繰り返してはいけません。



審査委員から一言

審査委員
鉢野正樹

読書感想文コンクールは、今年度で第3回目を迎えた。今回は応募数が89篇になり、第1回78篇、第2回の58篇を上回る多数の参加者に恵まれた。このような企画は最初には多くの応募者があっても、興味がうすれて勢いが失われても不思議ではない。しかし、幸いにして当初の勢いが維持されていることは喜ばしい限りである。これからも、多くの賛同者をえて、この企画が定着することを願うものである。

今回の選考を終えて、入賞作品について印象に残ったことは、これまでの作品に比して文章が美しくかったということである。これまでも入賞作品に優れた内容があったが、文章の美しさを感じたことはなかった。

現代は、映像の時代と呼ばれるにふさわしく、テレビや漫画のような映像から貴重な情報が豊富にえられる。しかし、見る・聞くをベースにした文化は、読む・書くをベースにした文化に比べると浅薄であることは疑いない。それは見る・聞くからでは、パスカルの「人間は考える葦」との言葉を引用するまでもなく、考えるという人間にとって最も重要な能力を養いけないからである。

本学の読書コンクールが、考えることの意義を継承することを願うものである。

優秀賞

「塩狩峠」を読んで

著者 三浦 綾子

出版社 新潮社

細川 舞子



思いもしなかった。幼い頃から人のために自分の命を捨てられる人間など、想像もつかないほどすごいまるで神様みたいな偉い人間だ、と私は思っていた。ところが、主人公の永野信夫という人は普通の子供だった。まさか立派な人が、いくら子供であろうと、人を馬鹿にしたり、^{うらや}羨んだり、憎んだりすることがあるなんて信じられなかった。私は、自分より劣っている人を馬鹿にし、いい気になって軽々しく失礼な行いをして、後悔することが多いのでなんとなく彼が身近に感じられた。小説の中では、私が信夫で、父・貞行に随分いさめられているかのように思われた。風潮に流されない父に叱られる信夫に、私も過去の情けない行動を思い出した。ただでさえ恥ずかしい行為がさらに恥ずかしかった。今思うと、自分のことしか考えていない行動だった。もしも私が同じことをされたら、きっとその人のことを嫌いになるだろう。それなのに友達私のわがままを許してくれた。いかに私が子供で、全てを受け止めてくれた友達が大人であったか。その時、私を叱ってくれる人がいなかったこともあって、今この貞行に叱られているような気がした。信夫が命がけで信仰を守る人になるには、貞行や母・菊によるところが大きいのだと思った。約束を守る、他人を思いやる、こうした人間の基本的なものを二人は自分の背できちんと見せているのだ。

私が信夫を尊敬しているのは、彼が「ほんとうの愛」をもって人々に接し、それを貫いた点だ。人の給料を盗もうとした三堀と同様に私も、他人を愛するなんて単なる理想だと思っていた。私は自分がかわいい。だからしんどいこと、つらいことを人のためにするなんて偽善でないと不可能だと思っていた。私だったら絶対にできない。私が三堀であっても彼と同じ行動をするだろう。自分にまとりつく信夫をおせっかいと疎む。信夫の気持ちを知っている私でさえも、少しうるさいと思うのだ。まして、三堀には堪え難いものだったろう。泥沼の中では信夫は偽善者に見え、見下されている気がして親切な者が疎ましい。

似ている。私は三堀に自分を重ねずにいられなかった。己が卑屈だとわかっていても、素直になれず、もっとひねくれていく。信夫ばかりか目に映る全てに反感を抱くのだろう、と手に取るかのごとく感じた。客観的に見ると愚かしい。けれど私は愚かしさより悲しく思えた。信夫は彼のためにどれほど悩み、自分の力不足を恨めしく思ったことだろう。でも私が彼を悲しく思う気持ちは、同情や優越感からくるもので三堀に罵られるのは信夫ではなく、この私なのだ。信夫の信仰からくる「愛」の前では、ただの一人よがりにはすぎない。だから信夫の「ほんとうの愛」が認められた時、私は泣いた。周囲の多くの人が彼についての考えを改めた時、もう信夫はいない。残酷だと思った。信夫が信夫らしく生きる以上、彼の死は覚悟されているのに、客車は暴走してしまう。なぜその場に信夫を遣わさせるのか、と天の采配を疑わずにいらなかった。私には彼が幸せの目前で逝くのが悔しく、悲しかった。婚約者・ふじ子が憐れだった。か

わいそうだった。しかし、二人とも不幸ではなかったのだ。

『一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの実を結ぶべし。』

——ようやく冒頭の新約聖書のことばがわかった。信夫は、死んだけれど多くの実を結び、生きているのだ。今また一つ私の中にも彼の実が芽を出しているのだと思った。

私は、信夫みたいな立派な人間になりたいとは思わない。彼の生き様は心に焼きつくような素晴らしいお手本だ。だが、私にはとても命まで人のために捨てることはできない。しかし、信夫が私の想像とは裏腹な少年から、自然に多くの命を救おうとする人物へと成長していったこと、私はその彼が「神様」ではなく「人間」であったことを目の当たりに見て、愚かなことばかりしてきた私にも、信夫までとはいかなくても素敵な人になることができるという可能性があることを信じたい。

信夫は、私の考えもしなかったものを、祝福された死の影で教えてくれた。私は素晴らしい人間に成長してゆくという可能性を大切にしたいと思う。卑屈になること、努力をやめること、諦めること、逃避すること、こうしたことは簡単で誰にでもできる。成長することには努力が必要だ。失敗し、苦しんで、傷つき、人を傷つけ、嘆き悔やんで、泣く日もあるだろう。それでも再び歩こうとする。私は生きたいのだ。信夫が人のために死ぬような、立派な人間になろうとしてなったのではないように。「私」を大事にしなから、失敗を恐れず、ゆっくり自然に大人になりたい。その中で少しずつ人のことを思いやれる温かさ、素直さを身につけていきたいと思う。



審査委員から一言

審査委員
指田春喜

応募総数89点のうち、薬学部学生は3点（女子3名）のエントリーと少なかったが、薬学科2年次生縄野梓さんが最優秀賞に選ばれたことは、薬学部教員として率直に嬉しかった。日々の講義・実習に追われる忙しい薬学部にあつての快挙である。

若者の活字離れが言われて久しく、日々の生活のなかで文章を綴るという作業をすることが益々減ってきているように思われる。読書感想文コンクールの対象として、ややそぐわない作品の感想文もあるように思えたが、応募数が年々増えていることは、何はともあれ喜ばしいことである。また、優秀賞・佳作以外にもそれらに値する作品もいくつかあったように思う。

日本人として、あらゆることの根底にあるのは、正しい日本語を使用する（できる）ことであり、そのためには優れた日本語の文章を日頃から読むことではないか。

次回には薬学部男子学生（大学院生を含む）の奮起を期待したい！

「教育と読書」

南谷 直利



一般に、教育（education）とは素質、能力を引き出す意味があり、タンス（人間）の引き出しを引いて中身（素質、能力）を取り出す作業にもたとえられる。このことは、自分だけの力では素質や能力が引き出されないのであり、外力となる第三者がそうしてくれることを示している。この第三者とは何か。学生にとっては3要因が存在する。第1の要因は良い先生（教員、指導者）、第2の要因は良い友達（学友、先輩、同期生、後輩）、そして第3の要因は良い本（書籍、図書、学術論文）である。この3要因を選んではじめて、教育を受ける環境が完備した証しとなり、大学に入学したことになる。学生活動上では、学生と競技スポーツが対峙している時のコーチの存在であったり、学生と学業成績が対峙している時の専門書の購入であったり、いわゆる当事者同志（学生とスポーツ・学業成績）以外の第三者（コーチ、専門書）が登場する。

第3回2003年度北陸大学読書感想文コンクールに89編の投稿がよせられたことは、学生と書籍、図書を結びつける基数としてのみと分析していない。それでどうなるか（向上、成果）である。コンクールに参加することにより、学生の自主性及び自立性を涵養し、個々人の素質、能力が開発、導き出されたとすれば、投稿された実績の意味は、教育機関としての重要な使命と期待の両面をも実証する。しかし、教育が重要なことは理解されるが、「教育をしていますよ」と公言する教育機関や教育者がいたとしたら、それはまがい物である。

読書とは、学生活動にとってごくごく当たり前（良い本を選ぶ）の現象である。このコンクールでは、当たり前のことを当たり前に行っており、それが特価的に評されることはない。これを人間の臓器にたとえれば、心臓であろう。毎日休まず働き、拍することが当たり前の臓器である。そして、心臓は絶大な信用と信頼を受け任されている。このコンクールも同様の立場で存在し、それで本望と考えている。コンクールの広報やアナウンスの内容は実施要項程度であり、特別なものは見当たらない。そして、コンクール終了後に、前述のような有益な実績や成果があったとしてもそれは当然の結果である。

本題とは少し内容が変わるが、私達はあまりにも点数稼ぎの毎日を生きているように思う。自分の点数（利益）にならないことには見向きもせず、社会や他人への関心が希薄になりがちである。「恩は身のため」の意は、他人に恩を与えるような寛容さがあれば、必ず他人から他人へと伝わり、めぐり巡って自分に恩が報われることである。これは、2人称の「Give and take」ではない。教育機関は第三者そのものであり、「他人に恩を与えるような寛容さ」の理念を基軸としていて、将来、学生が社会貢献していくことに着眼している。

それでは、良い本を得るにはどうしたらいいのか。ひとつの方法は、自分でお金を出して本を買い読ん

でいくことである。本の購入に対して、多額の投資は惜しまない。数年間の継続になるが、その内に、理解力や表現・文章力が向上しながら良い本と巡り会えるし、いわゆる読書量がすべてを決定する。学術論文もそうやって書けるように進歩していくのであろう。衣食住にお金をかけることは必要であるが、学生時代に会得した「本にお金をかける（与える）ような寛容さ」は「他人に恩を与えるような寛容さ」にも勝る。投資することのみを重視するわけではないが、引用文献（references）のまごびき方法も用いたりして買いあさると、めぐり巡って良い本と出会うことになるのかもしれない。

学生諸君には、教育機関に在籍しながら謙虚に、人間らしい生活をするを心掛けてもらいたい。「本にお金をかける（与える）ような寛容さ」を持って、読書活動に専念してほしい。されば、良い本に巡り会えることを結語として筆を置きたい。

(学術資料委員)



平成15年度中、ライブラリーセンター図書の利用が多かった院生・学生の皆さんです。(学籍番号順)

薬学部	外国語学部	法学部	留学生別科
石井 浩介 大江 和代 竹下 亜澄 丸山 友美 吉永 未来	屈 莉 林 佳水 前川 晋也 張 士傑 趙 莉 于 坤 董 杜宇 錢 閑適 彭 煒 小野塚翔栄 葉 翠 楊 雷	沈 娟 東 篤志 張 倍 王 梅 修 建華 王 其莉 張 曉楊	黄 英 車 鑫
			大学院
			堀 真也 曹 楓 錢 春軍

多くのご利用ありがとうございました。来年度もより一層のライブラリーセンターのご利用を期待しております。

CONTENTS

○ 第3回「北陸大学読書感想文コンクール」	(P.)
入賞者9名を表彰	1
○ 表彰式挨拶	2
○ 最優秀賞感想文	3
○ 優秀賞感想文	5
○ 寄贈図書	6
○ 教育と読書	11
○ 平成15年度におけるライブラリーセンター図書の利用が多かった院生・学生の皆さんを発表・公示	12

北陸大学ライブラリーセンター報 NO.17 1st-Half 2004

平成16年4月18日発行
 編集・発行：北陸大学ライブラリーセンター
 〒920-1180 金沢市太陽が丘1-1
 TEL. 076-229-3021
 FAX 076-229-4850
 ライブラリーセンターEメール：tlib@hokuriku-u.ac.jp
 北陸大学ホームページ：http://www.hokuriku-u.ac.jp/
 印刷：カンダ印刷株式会社